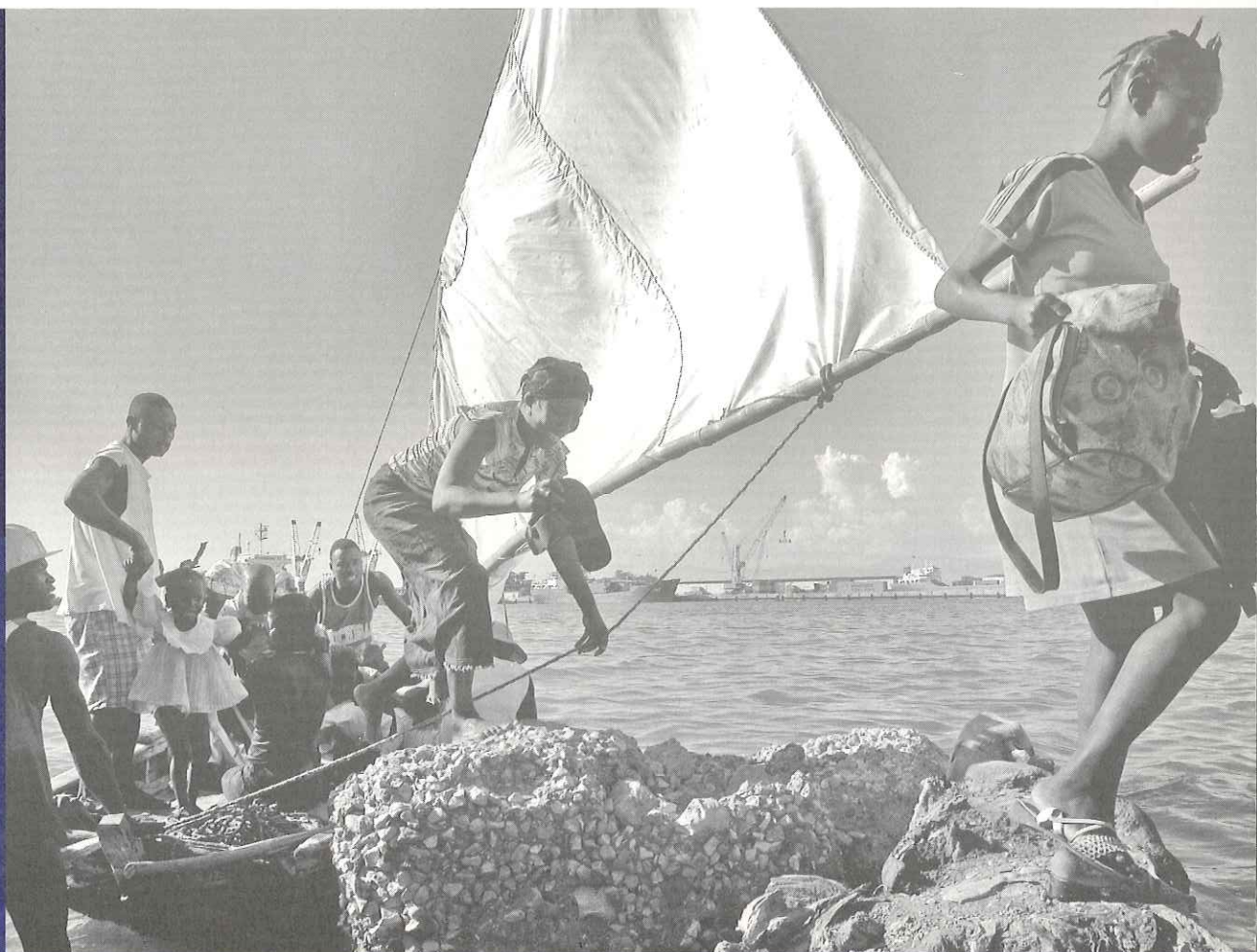


# CARE World

Vol. **6** ケア・インターナショナル ジャパン  
Newsletter  
June 2007

ケア・インターナショナル  
ジャパンは、世界70カ国  
以上で貧困の根源の解決  
に取り組む国際協力NGO、  
CAREのメンバーです。  
CAREの活動は、世界中の  
33万人のサポーターに支  
えられています。



## CARE World Vol. 6

### Contents



page3 事務局からの報告



page6 東ティモール  
「テトゥン語民話集出版プロジェクト」  
～失われた文化を母国語でまなぶ～  
事業部インターン 青木 真理子



page8 フィールド最前線  
スリランカ After-TEAプロジェクト  
「改善される紅茶農園における住民の生活」  
事業部 武田 勝彦

page10 カンボジア  
「女子教育事業 サマキクマールII」終了報告  
事業部 竹中 宏美

page11 私スタイルのCAREライフ  
ケア・インターナショナルジャパン ボランティア 廣瀬 匠子

page12 CARE Notice Board

## 事務局からの報告

### ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 講演会

2月11日に赤坂プリンスホテルにて、ケア・フレンズ東京の講演会が開催されました。講演会では、数週間前に北京オリンピックの日本代表監督に選任されたばかりの「時の人」、星野仙一氏をご自身の生い立ちや野球体験談を交えたお話をしてくださり、決断に迷ったときは「前へ」と、ポジティブなメッセージを会場の約1600人の参加者に贈ってくださいました。

3月24日には岡山国際ホテルにて、ケア・フレンズ岡山の講演会が開催されました。ジャズサクソ奏者の渡辺貞夫氏が、当時の日本では珍しかったサクソとの出会い、ニューヨークでのライブステージ、アフリカやミャンマーでの演奏活動などを、自ら撮影された美しいスライド写真を背景にお話してくださいました。

この講演会を通じて、ケア・フレンズ東京およびケア・フレンズ岡山の皆様から温かいご寄付をいただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。

### CARE支援組織代表 者会議が開催されま した

1992年に岡山で設立されて以来、現在、全国には5つのCARE支援組織（ケア・フレンズ岡山、ケア・フレンズ東京、ケア・フレンズ札幌、ケア・サポーターズクラブ大分、ケア・サポーターズクラブ熊本）がケア・インターナショナル ジャパンの活動を支援しています。2月23日には、初めて代表者会議を開き、各組織における共通の課題について、情報・アイデアの交換を行いました。また、今後、他の都道府県に組織を広げていく計画についても話し合いがなされました。

### 外務省による立ち入り 検査が行われました

3月2日、外務省による「公益法人の立入検査」が実施されました。当財団の主務官庁である外務省により3年に一度、行われる定例の検査です。組織の定款に沿って堅実な運営が行われているか、海外や国内での活動内容は公益性が高く適切なものか、財政管理は会計基準ののっとって透明性のある形でなされているか、ガバナンス（理事会・評議員会など）が機能しているか、などが検査のポイントとなりました。当財団は、検査項目のすべてにおいて一番良い評価を得ました。今後も堅実な組織運営を行っていく所存です。

## 麻布郵便局にて60年前の「ケア・パッケージ」を展示しました

東京都港区の麻布郵便局の協力を得て、3月1日～4月20日までの間、60年前の「ケア・パッケージ」\*の展示を行いました。また、ケア・パッケージの中に入っていた物資のサンプルと、戦後の日本でケア・パッケージを受け取った人々の写真も展示しました。

展示に立ち寄られた方の中には、ケア・パッケージに見覚えがある方や、中に入っていた物資を受け取ったことがあるという方がいらっしゃいました。ケア・インターナショナル ジャパンは、60年前にケア・パッケージを受け取られた方を探しています。この小包に心当たりのある方は、当団体事務局までご連絡ください。

\*1945年当時のCAREの活動の中心であった「ケア・パッケージ」と呼ばれる小包は日本にも届き、戦後8年間にわたり、1000万人がケア・パッケージの支援を受けました。食糧や衣類などの生活必需品だけでなく、農具のような生活を立て直すための物資が詰められていたケア・パッケージは、当時から長期的視野に立った支援を重視するCAREの活動を象徴するものです。戦後の日本において郵便局の窓口でケア・パッケージが配布されたことから、今回、麻布郵便局での展示企画が実現しました。



## テンブル大学において事務局長が講演を行いました

テンブル大学\*からの依頼を受け、3月22日にテンブル大学の“NGOs and International Development”のクラスで当団体事務局長が講演を行いました。

国際ネットワークの中で活動するCAREの組織的なしくみや、グローバルなスタンダードに沿った現場でのCAREの活動について話をしました。また、CAREの方針やアプローチについて、「ジャワ地震の緊急・復興支援におけるマーケット・ベースのアプローチ」「カンボジアの女子教育事業における女性のエンパワーメント」「ベトナムのインフラ事業における労働者のHIV/AIDS感染予防」の3つのケーススタディを用いて説明しました。

さまざまな国籍・経験を持つとても意識の高い学部生の方は熱心に話に聞き入り、講演終了後には多くの質問が出されました。今後、授業の一環としてインドに現地視察に行かれるとのこと、実体験を通してより視野と見識が深まり、将来的に国際協力になんらかの形で参加されることを期待しています。

\*数年前から当団体はテンブル大学との協力関係があり、同大学の方がインターンやボランティアという形でCAREをサポートしてくださっています。

## 恒例の「アジアの祭典 チャリティーバザー2007」に出展しました

4月18日、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて、恒例のアジア婦人友好会主催「アジアの祭典」が開催されました。会場では、アジア各国の民芸品、食べ物などの販売、楽器や歌などの民族音楽の演奏やくじ引きなどがなされ、大変な賑わいを見せていました。ケア・インターナショナル ジャパンは例年同様に横田評議員を中心にブースを出展し、このバザーによる収益金からご寄付をいただきました。ご協力いただきました皆様に、紙面を借りて心よりお礼申し上げます。



## ケア・サポーターズクラブ熊本主催にて活動報告会を開催しました

5月12日（土）、熊本市の熊本機能病院内の地域交流館において、ケア・サポーターズクラブ熊本主催のスリランカ「TEAプロジェクト」活動報告会を開催しました。

当日は、ケア・サポーターズクラブ熊本の会員の方を中心に多くの方にお集まりいただき、現地駐在スタッフによる報告をととても熱心に聞いていただきました。また、アンケートでは「日本とは異なった文化や生活環境に驚きました。自分がどれほど恵まれた環境にいるのかということを感じました」「具体的にCAREの活動内容を聞くことにより、熊本の私たちの活動が見え、人に対する呼びかけもできるといった」など多くのご感想をいただきました。

準備段階から当日の運営までいろいろと対応していただきましたケア・サポーターズクラブ熊本の事務局の皆様へ紙面を借りてお礼申し上げます。

## JICA九州にて活動報告会を開催しました

熊本における活動報告会開催に合わせて、福岡県北九州市にあるJICA九州においてもスリランカ「TEAプロジェクト」の報告を行いました。参加していただいた方からは、「複雑な事情を抱えている現実を知りました」「CAREの活動が現地で有効に行われていて、子どもたちの笑顔が印象的だった」「普段飲んでいる紅茶の裏側にある現状を知り、少しでも周りの人に伝えられたら、と思いました」などのご感想をいただきました。また、「今後、さまざまな国の貧困層がどのような状況に置かれていて、何を思っているのかということを知りたい」「もっと九州でCAREの活動を知ることができるイベントがあるとよい」という声も聞かれました。

準備段階から当日の運営までいろいろとお世話になりましたJICA九州ご担当者の方にこの場を借りてお礼申し上げます。

## 「じゃがいもの会」に参加しました

5月17日、NHKホールにて行われた「じゃがいもの会」に参加、出展をしました。歌手の森進一さんの呼びかけで1985年に始まり、多くの歌手や著名人の方々が集まって23年という長い間、開催されてきた会ですが、今年で最後ということもあり、大勢の方が会場に詰めかけました。CAREのブースにも多くの方にお越しいただき、Tシャツなどを買っていただきました。この収益金はCAREの活動に有効に役立させていただきます。ありがとうございました。



## 西町インターナショナルスクールイベント「Spring Fling」に参加しました

晴天に恵まれた5月26日土曜日、元麻布にある西町インターナショナルスクールにて毎年開催されている“Spring Fling-Nishimachi Community Service Day”に参加しました。今年はお子さんたちの手でCAREのロゴを作り、それを使ってTシャツを作成しました。子どもたちの小さな手で作られたロゴのTシャツはどれも個性的でかわいらしくできました。ご協力いただいた西町インターナショナルスクールの皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



# テトウン語民話集出版プロジェクト ～失われた文化を母国語でまなぶ～ 東ティモール



雑誌「ラファエック」。小学校低学年用、高学年用、教師用の3種類がある

事業部インターン 青木 真理子

## ■基本情報

活動期間：2007年1月1日～4月30日  
(4カ月間)

地域：東ティモール全域（面積：約1万4000平方キロメートル、人口：約94.7万人 [2005年]）  
対象者：東ティモールの全小中学生（257,999人）と教員。  
配布先は全小中学校および図書館（約2,000箇所）

関係者：教員、コミュニティ、地方教育行政機関

支援者：協賛企業および一般寄付  
\*この事業は、花王株式会社、花王ハートポケット倶楽部、株式会社毛利建築設計事務所、ディアシステム株式会社、飛鳥建設株式会社、株式会社スミロン山本様からの事業協賛を受けました。  
事業規模：民話集出版プロジェクト 850千円

## 事業の背景

東ティモールは、インドネシアの東に位置する岩手県ほどの小さな国です。16世紀にポルトガルの植民地となり、450年の統治の後、インドネシアに27年間統合され、2002年によりやく独立を果たしました。独立前の内乱で多くの人が命を失い、インフラや学校・保健施設をはじめとする国の公共サービスが多大な損害を受けました。現在、国民の多くは貧困レベルにあり、一日55セント以下で暮らす人の数が40%にも達し、5歳以下の子どもの47%が発育不全であるとされています。また昨年5月には、首都ディリにおいて、ストライキを起こして解雇された元軍人の反乱が失業している若者を中心とする暴動に発展し、ディリの住民の大半が郊外に逃れるといった出来事がありました。「世界で最も若い国」で安定した社会が形成されるまでには、まだ時間を要します。

東ティモールにおいて最も話されている言語はテトウン語です。インドネシア統治時代にはインドネシア語の使用が強

要され、それまで学校で使われてきたポルトガル語も禁止されました。テトウン語および東ティモール独自の文化を認めることは、ナショナリズムを高揚させ、内乱にもつながる可能性があるため、インドネシア政府はこれを抑制してきました。長い植民地化と抑制が、東ティモール住民のアイデンティティの喪失という問題を生み出しました。

## 問題点

長い植民地経験と高い成人非識字率(40%)により、東ティモール独自の文化を伝える書物の不足は深刻です。また内戦中に、学校教師の大半を占めていたインドネシア人教師のほとんどが離職したため、教員も不足しています。95%の学校を焼失し、多くの学校設備と教材も失いました。独立後は公用語としてまずポルトガル語、後にテトウン語が認められるようになりました。現在はポルトガル語で書かれた教科書が供給されていますが、その数は圧倒的に不足しています。全科目の教科書を一式持っている子どもは全体の10%のみで、半数以上の子どもは一冊も持っていません。テトウン語の教育に関しては、歴史的・文化的背景からテトウン語で書かれた書物がほとんどなく、テトウン語で発信される情報自体が極端に少ない状況です。一方で、出生率が高く、全人口のうち15歳以下の割合は48%であるため、将来を担う次世代への教育の充実が緊急課題です。

## CAREによる教育支援

CAREの教育プロジェクトにおいて、初のテトウン語による教育誌「ラファエック誌」が2000年に創刊され、東ティモールのすべての小中学校を通じて生徒に配布されました。出版物が極端に少ない東ティモールで、唯一自分のものとして所有できる本です。隔月で刊行されるラファエック誌は学校の副教材として活用さ

れ、教材不足を補っています。国内の郵便制度が未整備なので、CAREのスタッフがオートバイで国内全13州のすべての小学校に直接届けており、その際に学校や生徒からの投書なども回収しています。ラファエック誌に投稿することは、情報を発信する機会が非常に少ない子どもたちにとって、「書くこと」へのモチベーションを高め、コミュニケーション能力を向上させる機会になっています。この活動は、教育省からの全面的な支持と協力を得ており、ラファエック誌を使って指導する教員に対する訓練もなされています。

## テトウン語民話集出版プロジェクトの目標と活動

このプロジェクトでは、テトウン語による民話集の作成と使用を通じて、東ティモール独自の文化を再認識し、初等教育の向上と子どもの権利の推進に貢献することを事業目標とします。このプロジェクトでの活動は、ラファエック誌上での公募をもとに実施されています。

### 1) 民話の公募

読者から、地域に語り継がれている民話を公募します。各家庭で語り継がれてきた民話を記録する作業は、子どもたちの作文能力を向上させることにつながります。

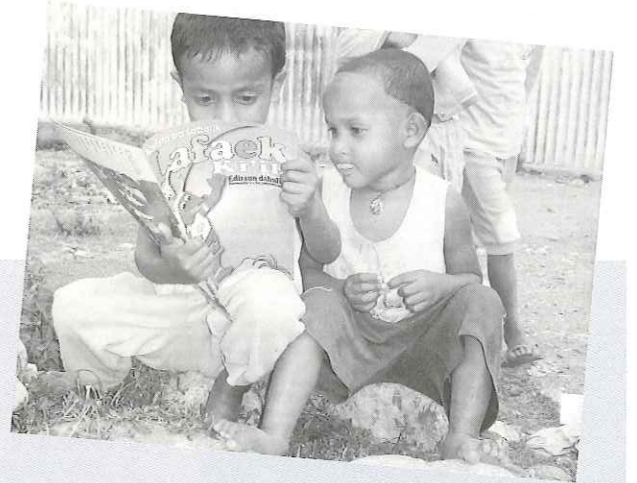
### 2) 民話本の出版

公募した民話を編集し、3000冊出版します。出版された本は、東ティモール史上初のテトウン語による民話集となります。東ティモール独自の文化やアイデンティティの再認識に貢献することが期待されます。

### 3) 学校・図書館への配布

出版された本は、東ティモールのすべての小中学校に3冊ずつ配布し、読み物および教材として使用されます。地域の図書館にも配布されます。学校や図書館に配布することでテトウン語の書物を増やし、普段なかなか書物を手に入れない子どもたちの読み書きを促進します。また質の高い教材の提供により、教育の質の向上をはかります。

ケア・インターナショナルジャパンは、今年度以降も東ティモールの子どもたちのための支援事業を継続していく予定です。募金・書き損じハガキや使用済み切手収集などの皆様のご協力を引き続きお願いいたします。



## 東ティモールからのストーリー

### 紛争に苦しむ国において言葉が持つちから

東ティモールには、定期的な郵便システムは存在しません。古くから、東ティモールの人々は友人や他人の好意に頼り手紙を届けてもらっています。別の町へ出かける家族や友人、またバスやタクシーの運転手が配達人になってくれるのです。しかし東ティモールは山の多い地形であり、通るのも困難なほど整備されていない道路状況は、どんなに意気込んだ配達人にも大きなチャレンジとなります。それでも、大きな目の物静かな11歳のAnoは、辛抱強く手紙の到着を待ちます。

Anoはすでに自分の文通相手か誰かを知っています。なぜなら彼は数カ月前に、初めての手紙を同じ4年生の文通相手の子にあてて書いているからです。Anoの書いた手紙は、新しい形の配達人によって文通相手に届けられました。その配達人とは、東ティモール13地域の28万人の子どもたちに児童雑誌Lafaek(ラファエック)を届けるために、困難な道をバイクで定期的に行き来する13人のCAREスタッフの一人です。Lafaekは、母国語にあたるテトウン語で発行されている唯一の児童雑誌で、市民教育、平和構築、子どもの権利などの話題を提供しています。このLafaekを届けるために作られた配達システムを生かし、CAREは東ティモール中の子どもたちを、子どもたち自らの言葉によってつないでいくことを実現しました。

4,5,6年生の子どもたちは、異なる地域に住む同じ学年の子どもたちに、他の誰かに読まれる心配をすることなく自由な内容の手紙を書きます。文通制度は、子ども、先生や女性の権利についての情報を提供するCAREのHaburas Labarik(子どもたちの育み)プロジェクトの一貫として行っています。手紙を交換することで、子どもたちは表現の自由という権利を体験すると共に、お互いの生活について学ぶことで地域の違いについての理解を深め、友情を育てていきます。

Anoの文通相手のPutulはディリから200キロ離れたOecussiという、隔離された地域に住んでいます。Anoは、もっとOecussiについて知りたいと思っています。「手紙の中で、

PutulにOecussiはどこなところか聞いてみたんだ。いいところか、悪いところかって」とAnoは話します。「あと、学校でテトウン語やポルトガル語を習ったり、友だちとサッカーをやったり遊ぶことなど、僕の好きなことについても書いたんだ」。

現在、Anoは彼の好きなことに以前ほど時間を費やすことができなくなっています。これは、Anoの自宅近くで起こった若者による暴動の影響で、二カ月前から、彼の家族が約1000人の人々と共にディリにある教会の敷地で避難生活を始めたからです。「争いの音が聞こえてきたとき、僕はとても怖くなったんだ。怪我をする人たちを見たり、殺された人もいたと聞いたよ」とAnoは振り返ります。今年初めに首都ディリ各地で再び起こった暴動により、既にディリ周辺に散らばる難民キャンプで生活を強いられている何万人もの人々に加え、新たに約8千人が避難民となりました。ディリで昨年4月に14万人の避難民を出した暴動が発生してから既に1年が経過していますが、未だに約3万7千人の人が難民キャンプで生活をしており、また7万人が郊外で親戚の家に身を寄せています。

Anoの家族は6人で、小さなマットレス1つと持ち物を入れる籠1つだけがあるテントで、他の10名の人々と一緒に生活しています。キャンプに住む子どもたちはほとんど玩具を持っておらず、輪ゴムと棒を使って輪投げをしたり、多くの輪ゴムをつなげて作った長いゴムの上を、歌を歌いながら跳ぶなど、キャンプにあるものからゲームを考え出して遊びます。

ディリに住む多くの子どもたち同様、Anoも暴動によって何週間も学校に通うことができず、彼は、最近になって近所が落ち着きを取り戻しつつあるために自宅に足を運べるようになったこと、また時折学校に通えるようになったことを嬉しく思っています。将来人を助ける仕事に就きたいAnoは、勉強を続けることの大切さを説明しています。「大きくなったら医者になりたい」と彼は言

います。「多くの人が病気になるのを見てきているので、医者になることが彼らを助ける一つの方法だと思っているよ」。学校では、暴動で怪我をしているのではないかとAnoが心配していた親友のSimaoと再会することができました。また、間もなくCARE OecussiのスタッフからCARE ディリのスタッフGremaldoを介して届けられる、長く楽しみにしていたPutulからの返事も受け取ることもできます。

現地のCAREスタッフは、子どもたちの重要な手紙の配達人であると同時に、参加校に情報の入ったパッケージを配布し、先生や生徒に対して文通活動についての説明も行います。2004年に文通活動が開始した際には、東ティモール全地域、260校の6543名の子どもたちが活動に参加しました。そのうちの95%が新しく知り合った友だちとの文通を今後も継続していきたいと話しています。昨年4月からの情勢不安が手紙の配達を中断させたため、子どもたちは通常より長く返事を待たなければなりません。現在は活動が再開されつつあり、Anoや彼のクラスメートたちは初めての返事を5月初旬までに受け取ることができそうです。それ以降のCAREの文通活動では、最終学力テスト期間中と卒業式の時期を除いて月一回、手紙が配達されていきます。

コミュニティの分裂や競争、偏見が暴動を駆り立てている状況の中で、相手に対する理解を促進し、橋渡しをすることは以前にも増して重要となっています。Anoは、人々が結束することの大切さを信じる一人です。「僕は、政府に他の人々と一緒に力を合わせてこの危機を解決してほしい」と彼は語ります。次の手紙で彼が新しい友達と分かち合いたいことがたくさんあることは、言うまでもないでしょう。

\*CAREは子どもたちの安全に真剣に取り組む団体です。本文で使用されている子どもたちの名前は、子どもたちの安全を確保するため変更されています。



# フィールド 最前線

## スリランカ After-TEA プロジェクト 「改善される 紅茶農園における 住民の生活」

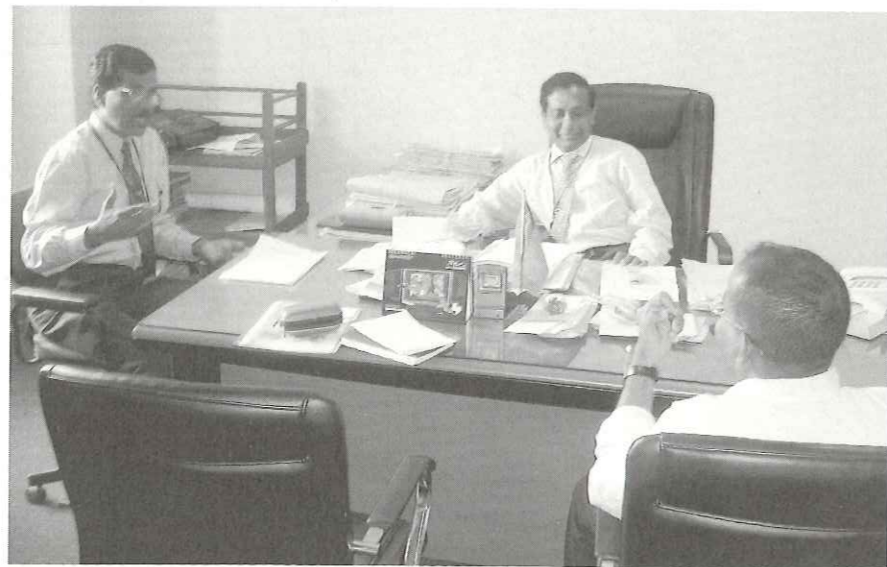
事業部  
武田 勝彦

ケア・インターナショナル ジャパンは、2003年よりスリランカにおいて、「プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）」を行ってきました。そして、2006年7月から第二期事業として、独立行政法人 国際協力機構（JICA）との連携により、「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト（After-TEAプロジェクト）」を実施しています。

前事業のTEAプロジェクトにおける活動を通して、紅茶農園に住む居住者たちの社会生活はかなり改善されました。その改善された生活が持続するような環境を整えることがAfter-TEAプロジェクトの目的です。このプロジェクトでは、①農園内の連携・コミュニケーションの強化、②住民組織の運営能力の強化、③農園内外の連携システムの構築という3つの目標に基づいて活動を行っています。

### 農園内外の接点： インフォメーション・センター

前事業のTEAプロジェクトにおいて、この事業が対象とする15箇所の各農園に設置されたインフォメーション・センターは、農園内と農園外部の社会をつなぐ窓口としての機能を持っています。この施設を通して外部のサービス提供団体は公共・社会サービスを提供し、農園内住民はそれらを利用することができるようになりました。これま



スリランカ郵政省と農園内郵便配達について協議する

で農園内には公共使用目的の建物が存在しなかったため、インフォメーション・センターは情報発信・情報収集の拠点として重要なものであるという認識が農園内住民の間で高まっています。

### 国民の基本的権利： 公的書類の取得

インフォメーション・センターには、テーマ別にいくつかのブースがあります。その一つに公的書類のコーナーがあります。

農園外の人々と比較して、農園内の住民の多くは、これまで出生証明書、IDカード、婚姻証明書などの主要な公的書類を持っていませんでした。例えばIDカードを持っていないと、高等教育を受けられない、銀行口座を開設できない、国内で自由に移動することも難しい、という状況に置かれます。国民として当然の権利を行使できないのです。行政官が農園内へ来て、書類発行などの行政手続きを行うこともありませんでした。

しかし現在は、聞き取り調査の結果、各農園において重要な公的書類を所持していない住民のデータが収集され、行政官がインフォメーション・センターを定期的に訪問し、出生証明書など公的書類発行のための処理を行うようになりました。

### 公共サービスの向上に向けて： 郵便事情の問題点

インフォメーション・センターには郵便コーナーもあり、郵便制度や料金などについての説明が掲示され、住民が郵便事情についての情報を得ることができるようになりました。しかしその一方で、住民宛の郵便が届くのはプランテーション会社の郵便受けであり、会社の善意で職員が届けない限り、住民に郵便物はなかなか届かないというのが現状です。住民の住居（長屋）には住所や私書箱など郵便が届く番地がないのですが、郵便局側で各住居に勝手に番号を振ることもできません。インフォメーション・センターは、住民代表組織である参加型チームが農園内の課題と解決策について話し合う場にもなっていますが、この郵便問題も参加型チームを通して住民から提示された主要な課題の一つです。

現在、この問題の解決に向けて、郵

政省や地方行政など郵便サービスの関係者との協議を重ねています。また、参加型チームによる話し合いの中で解決に向けた行動計画が作成され、住民の住居まで直接、配達を行う試みが現場レベルと行政レベルでなされることになりました。

### インフォメーション・センターという「箱」に住民の力という「息吹」

「インフォメーション・センター」という拠点ができたことで、公的書類が発行され、住民の権利が確保されるようになっただけでなく、ここで住民代表が集まり、話し合い、解決策を検討・実行することで、農園内の環境や住民側の意識に新しい変化をもたらしつつあります。インフォメーション・センターの運営も住民組織が主体となってなされています。ある農園では、住民組織がこのプロジェクトや他団体などから支援を得て、手工芸品の展示

会を開催し、その入場料をインフォメーション・センターの運営費として集めました。さらに、センターを運営する住民の主要メンバーからの要望により、運営に必要な会計知識などを身につけるためのトレーニングも行われることになりました。

今後は、農園内外の連携システムの構築に向けて、行政機関などの公共・社会サービス提供組織との連絡会を設立するとともに、農園経営側や地方行政官などに対して意識向上ワークショップやトレーニングを実施し、農園における基礎社会サービスの必要性を引き続き訴えていきます。また、2007年6月までには連携構築に向けた第1回目のミーティングが開催され、行政関係者、NGO、そして住民組織が参加する予定です。



インフォメーション・センターで農園内の問題について話し合う参加型チーム。女性メンバーが積極的に活動している

インフォメーション・センターにて開催された手工芸品の展示会の様子。インフォメーション・センターをどのように活用するかということも住民自ら考える



カンボジア

## 「女子教育事業 サマキクマールII」 終了報告

事業部 竹中 宏美



家庭菜園教室の様子。基礎識字教室、上級識字教室を終了した大半の女子が家庭菜園教室まで進学した

### ■基本情報

活動期間：2004年2月～2006年12月  
(2年10カ月)  
活動地域：カンボジア王国 プレイベン州  
ピムチョア地区  
対象者：退学の可能性が高い小学校高学年女子と、就学していない13歳～25歳の女子  
約1,400名およびコミュニティ住民  
資金提供者：国際協力機構 (JICA)、  
アートコーポレーション株式会社

カンボジアでは、子どもの就学率は全体的には改善してきていますが、親や地域の人々の女子教育に対する理解は十分ではありません。特に近年は、若い女性において、首都プノンペン市に建設された縫製工場で働き、現金収入を得る機会が増えていきます。家庭の収入が低く生活が苦しい家庭に生まれ、労働力として家族を支えることができる年齢の女子は、村で家族を支えるという伝統的な役割に加え、出稼ぎに出て家族を支援するという、二つの要因によって教育を受ける機会をあきらめなくてはならない状況にあります。

### 3つのアプローチ

このプロジェクトは、就学年齢の女子が教育を受けられる、あるいは、継続できるよう、家庭・学校・地域全体が教育に対する理解を深め、女子教育を支援する環境を築くことを目的としました。また、「生きる力」「コミュニティの参加」「信頼関係の構築」という3つのアプローチを大切にしました。活動を皆で運営していくことで、住民、特に女子は、自分の意見を持ち、人前で発言する力を伸ばしました。また、地域行政が住民からの声を聞き、それに応えられるよう知識と技術を身につけていく過程で、人々のつながりや信頼関係が築かれていきました。

### 活動の成果

まず一つ目の成果として、女子が学校教育を受ける機会が向上しました。貧しい家庭の482名の女子生徒は、奨学制度によって制服や学用品など学校教育に必要なものを受け取りました。また、単に奨学金という「もの」の支給だけではなく、コミュニティと女子生徒グループが家庭訪問などを通じて奨学生を支える仕組みを作りました。

第二の成果として、質の高い教育の提供がなされました。生活に密着した題材をもとに学ぶ基礎識字教室(6カ月間)、保健知識を取り入れた上級識字教室(4カ月間)、そして識字能力だけでなく、栄養学や有機栽培を学ぶ家庭菜園教室(4カ月間)があり、コミュニティの人々とともに運営されました。1,052名の女子が基礎識字教室で生活に必要な識字能力を身につけ、大半が上級識字教室、家庭菜園教室へと進学しました。終了した学生のうち90%は国家識字試験に合格し、昨年の州の識字能力コンテストでは、上位の1、2位を識字教室の学生が獲得しました。

識字教室の教員24名には、コミュニティに貢献したいという熱意を持った人がコミュニティから採用されました。全員教員の資格を持っていませんでしたが、継続的に学生中心の教授法やクラス運営の方法についての訓練を受けました。その結果、識字教室の教員はコミュニティの重要な人材となり、村や地区のチーフに選ばれたり、事業終了後に公教育の学校教員として働くことになるなど活躍の場を広げました。

第三の成果として、女子教育に対するコミュニティの理解が深まりました。トレーニングを受けたコミュニティの活動グループにより、コミュニ

ティの幅広い人々を対象に多くのワークショップが開かれ、話し合いの場が作られました。その結果、親や村人は女子教育の重要性を理解し、女子に学校を続けるよう促すなど、意識の変化が行動の変化として現れるようになりました。

最後に、女子教育支援のための枠組みの基盤が構築されたことが成果として挙げられます。枠組み形成に不可欠なコミュニティの自信、コミュニティと地域行政のネットワークや信頼関係がプロジェクトを通して構築されました。お金やものではなく、新しい情報、人々からの尊敬・理解・信頼といった「目に見えない利益」によって生きていくための力や自信を得た、という声が活動に関わった人々から多く聞かれました。今後のコミュニティの発展に必要な資源を生み出したといえます。

### これから

このプロジェクトは、女子教育に対する意識を向上させただけでなく、コミュニティの発展の基盤となる人材育成、意識の改革、ネットワークや信頼関係を成果として生み出し、個人にもコミュニティにも前向きなインパクトを与えました。CAREは、このプロジェクトの経験を生かし、今後もコミュニティにおける包括的な支援を継続していきます。

事業終了にともない、これまでの活動をふりかえるサマキクマールのプロジェクトチーム！



### CAREとの出会い

ケア・インターナショナル ジャパン ボランティア 廣瀬 匠子



私が初めてCAREに出会ったのは、小学校2年生のときでした。7年半住んでいたアメリカのジョージア州を離れてニューヨーク州に引っ越すときに、母が世界に恵まれない人が多くいることを伝えたい、クリスマスにプレゼントをもらうだけでなく自分からも何かを与えられる人間になってほしい、という思いでCAREを紹介してくれたのです。CARE USAの事務局が私たちの住んでいたアトランタにあったこともあり、私たちは初めてその年のクリスマスに少しばかりの寄付をしました。しかし母は、支援することを決して強制することはなく、それ以降、CAREと関わりを持つかどうかを完全に私の意志に任せました。私はこのことを今でも感謝しています。「ボランティア精神」とは、人から言われて嫌々するものであってはいけないと私は信じていますし、もしその時に母が強制していたら、恐らく高校生になる現在まで活動を続けなかったらと思うと思います。

CAREに出会うまで私は衣食住が足りていることや五体満足であることに感謝したこともなく、世界のどこかで私と同じ年の子どもたちが銃の音を聞き、恐怖で震えながら眠ろうとしていることもほとんど考えたことがありませんでした。しかし、棒のような手足と膨らんだお腹の子どもたちの写真を見たときに、私は世界中で苦しんでいる人々の生活の向上に少しでも貢献したいと思い、CAREを通して何かをしようと決心しました。

そして私は母に代わり、CAREの活動を家族に伝える役割を担うことになりました。CAREのホームページや送られてきたニュースレターを参考に、CAREのさまざまな事業についてポスターを描いたり、事業のより詳しい説明と感想を交えた独自のニュースレターを作ったりしました。私の部屋のドア近くには「CAREコーナー」を設け、自分で作ったポスターやニュースレターを展示し、毎年年末にCAREに送るお金を少しずつ貯めていくためにティッシュ箱で作った募金箱も置きました。

ある日、私は当時のCARE USAの事務局長であったPeter D. Bellさんに手紙を書いたことにしました。今思うと多少大胆な行動だった気がしますが、そのときには「返事がこないかも」というより「CAREが大好き！」という思いを伝えたいという気持ちのほうが強かったことを覚えています。その後、事務局のJamie

Stewartさんから返事があり、彼女が担当していたニュースレター「HealthCARE」に記事を書いてみたいかという依頼をいただきました。記事を書いた後もJamieは世界中の国から私に手紙を送ってくれたり、自分の活動について教えてくれたりしました。本当に素晴らしい経験をさせていただいたと思っています。



当時のCARE USAのニュースレター、HealthCAREの表紙を飾った廣瀬さんの記事。CAREに対する熱い思いが伝わってくる

そしてアメリカ生活12年の後、私は日本に帰国し、初めて日本の学校に入学しました。今までは全く違う環境に期待と不安を抱きながら楽しく充実した毎日を送っていましたが、完全に新しい生活に慣れることは難しく、知らず知らずのうちに負担になっていたこともあり、あっという間に時間だけが過ぎていきました。心の奥では今までと同じようにCAREの活動に関わりたいと思いつつも実行に移すことはありませんでした。しかし高一の夏休みに学校でボランティアの課題が出たときに、私は迷うことなくCAREの日本事務局に行くことにし、そこで私は日本のCAREチームの皆様に出会うことができました。そして今でも事務局の作業やイベントなどのお手伝いを通してアカデミックかつ楽しい活動に関わらせていただいています！

今までの活動で最も印象に残っているのは、イベントでCAREブースに来てくれたおじいさんがCAREパッケージの展示を見て「私はこれに助けてもらったのだよ。チョコレートがすごくおいしかったのを今でも鮮明に覚えているよ」と言っていたことです。そこで私は改めてCARE

の活動の重要性を痛感し、一人でも多くの人に笑顔をもたらすことができたらなと感じました。私にとってCAREは初めて世界の貧困について教えてくれた「先生」です。また、国連関係の多くの団体が実現できない「世界の最も貧しい地域の人々を助ける」というミッションを現実のものにしているということや、支援だけに留まるのではなく現地の人々の自立をも重視しているという点にCAREの活動の意義があると私は信じています。CAREの「現地の人々の尊厳を守る」という姿勢が私は大好きです。



2005年秋に日比谷公園にて開催されたグローバル・フェスティバルにて。CAREスタッフ、ボランティアさんと

今年は受験生になることもあり、CAREの活動に参加することは難しいかもしれませんが、これからも自分のできる範囲内で関わらせていただきたいと思っています。「愛の反対は無関心である」というマザー・テレサの言葉があります。特に私と同年代の人において、アメリカに比べて日本でボランティアに興味を持っている人が少ないように感じるので、まずは関心を持つ(=CAREする)ことから始めてほしいと思います！



CAREとして昨年の夏に初めて参加した麻布十番納涼まつりにて。友だちを誘って、CAREブースにて呼びかけをしてくれました



北海道への修学旅行のときの1コマ。学校では手話部の部長を務め、さまざまな活動にも積極的に参加する廣瀬さんは、現在、高校3年生

# CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン  
ニュースレター  
CARE World Vol.6  
2007年6月30日発行 (季刊)  
編集責任者：野口 千歳  
編集：菅沼 みゆき

財団法人  
ケア・インターナショナル ジャパン  
〒171-0032  
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2  
Tel : 03-5950-1335  
Fax : 03-5950-1375  
E-mail : info@careintjp.org  
www.careintjp.org

# CARE Notice Board

## 定期支援のお願い

ケア・インターナショナル ジャパンでは、毎月、決まった金額をご支援いただく、「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」にご協力いただける方々を募集しています。継続的で安定したご寄付は、途上国の人々の自立を助けるという、息の長い活動を、より確実に、より効果的に進めることを可能にしてくれます。ぜひ、ご協力をお願いいたします。

### ● CAREマンスリー・ギビング・プログラムとは ●

1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を、毎月1回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただく制度です。

なお、自動引き落としに手数料はかかりません。また、ご連絡いただければ、寄付額の変更やご寄付の停止にもすぐに対応いたしますので、安心してご参加ください。

### ● CAREマンスリー・ギビング・プログラムに参加いただいた方には ●

世界各地で行われている支援活動についての最新情報やコミュニティの人々の生の声などを紹介するニュースレターを随時お届けするとともに、年1回発行する「年次報告書」で、ケア・インターナショナル ジャパンの活動内容や運営状況について詳しくご報告いたします。

そのほか、個人賛助会員（年会費 1口 10,000円）や個人準賛助会員（年会費 1口 5,000円）も随時募集しています。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」や会員制度への参加をご希望の方は、以下までご連絡ください。すぐに、関係資料をお送りさせていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

(財) ケア・インターナショナル ジャパン 募金・個人会員担当

TEL : 03-5950-1335 FAX : 03-5950-1375

E-mail : monthly@careintjp.org

## \*皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！